

# 中等作文教科書の考察

——八波則吉氏編著のばあい——

野地潤家

八波則吉氏の編著にかかる昭和期(戦前)中等作文教科書には、つぎのように中学校(男子用)三種類、女学校二種類が数えられる。

- 1 「新制中等作文」全四冊 卷一―卷三、上級用  
昭和5・1・5 英進社刊
  - 1' 「新制女子作文」全四冊 卷一―卷三、上級用  
昭和5・1・5 英進社刊
  - 2 「現代中等新作文」全五冊 卷一―卷五、  
昭和10・1・5 英進社刊
  - 2' 「現代女子新作文」全四冊 卷一―卷三、上級用  
昭和9・10・25 英進社刊
  - 3 「現代中等書翰文」全 昭和12・1・5 英進社刊
  - 4 「中等新作文」全四冊 卷一―卷三、上級用  
昭和15・1・5 英進社刊
- さて、これら各中等作文教科書の編修上の方針・ねらい・配慮等については、それぞれつぎのように述べられていた。

1 「新制中等作文」(昭和5)のばあい

一 趣味と実益とを兼ね、各巻を通じて生徒諸君と同じ水準に立つて編纂した。

二 文話は平易明確を主として抽象的な説明を避け、文例は多く全国中等学校生徒諸君の作から採った。

三 興味を増し理會を助ける為、写真・挿画・原稿の見本・添削例等を豊富に入れた。

四 類題を多く掲げ、なほ「自然と人事」「常用漢字首別表」を――特に上級用には「高等諸学校入学試験作文々題別表」を附載した。

五 課外読物としても恰当のものとする。

なお、「新制女子作文」(昭和5)のばあいも、ほとんど同じであるが、それぞれの文末は、たとえば「―編纂しました」「―採択しました」「―入れました」「―附載しました」「―と信じてゐます」のように、ていねい体で書かれている。

2 「現代中等新作文」(昭和10)のばあい

一 趣味あること。日常生活に役立つこと。上級に至るに従つて受験的色彩を濃厚にしたこと。これが本書の三大特徴である。

二 すべて当該学年の生徒諸君と同じ水準に立つて編纂し、文例

は広く全国各府県に亘つて中等学校生徒諸君の作品から採択した。

三 別刷として各巻ごとに添削例を掲げ、各種書翰例・日記例・諸書式例等、實際生活に必要なものは漏れなくこれを載せた。なほ写真・挿画を豊富にして、興味を増し理會を助けることに努めた。

四 附録として、各巻ごとに「常用漢字音別表」を掲げ、なほ卷一には「誤り易い文字上の研」、卷二には「手紙用語例」、卷三には「自然と人事」、卷四、五には「高等諸学校入学試験作文々題類別表」を附載した。

五 自習書としても、課外読み物としても、恰当なものと信ずる。

なお、「現代女子新作文」(昭和9)のばあいも、ほとんど同じであるが、文末はすべてていねい体で書かれている。

### 3 「中等新作文」(昭和15)のばあい

一 文章は芸術である。従つて作文は趣味を主とするものではなくてはならない。本書は先づこの点に留意して、文話・文例ともに平明達意を旨とし、生徒諸氏の趣味の涵養に力めてゐる。各巻とも写真・挿画を豊富にし、三色版その他の別刷を加えてゐるのも、この趣旨に外ならない。

二 普通教育に於ける作文は、『思想・体験ノ明確自由ナル表現』をなし、日常生活に役立てることが眼目である。「中学を出ても手紙一本ろくに書けない」といふやうな非難は、吾々の屢々、耳にするところで、これではその教養のほども推しはかられるのではないか。本書は『実用ニ適スル』といふ点にも十分

力を注いで、手紙についても一祝儀・不祝儀の手紙をはじめ、すべての種類に亘つて——詳細に叙述解説を施し、すぐそのまゝ役立つように力めてゐる。

三 上級に進むに従つて受験的色彩を濃厚にしてゐる。与へられた題目に就いて与へられた時間内に——時には命ぜられた文体で、而も制限された字数で——思想・体験を表現するのは一つの術である。自由奔放に筆を運ぶ創作とは自らその趣を異にしてゐる。この場合、文例が『型に嵌る』のは蓋し已むを得ないことで、しかもこれが受験生に対する適切な指導であると考へる。

四 作文の上達は練習に限る。文例を見て、「何、これ位のものなら自分でも出来る」と直ぐに筆を執つて書いて見ることである。この意味に於て、本書はすべて当該学年の諸子と同じ水準に立つて編纂し、文例は広く全国各府県に亘つて中等学校生徒諸子の作品から採択した。生徒作に対する著者の評語も、文の批評・鑑賞力を養ふ上の参考にならうと思ふ。

五 別刷として原稿例、添削例、各種書翰例、日記例等、示範の要あるものは悉くこれを掲げた。

六 附録として、各巻ごとに『常用漢字音別表』を掲げ、なほ卷一には『誤り易い文字上の研』、卷二には『手紙用語例』、卷三には『願書・届書並に履歴書の認め方』、上級用には『高等諸学校入学試験作文々題類別表』を附載した。

七 本書の文例の多くは、今次の支那事変勃発後の作であるから、時代を反映しておのづから戦時気分も漂つて居り、東亜新秩序建設の熱意に燃えてゐることを特記したい。

以上、「新制中等作文」(昭和5) ↓ 「現代中等新作文」(昭和10) ↓ 「中等新作文」(昭和15) は、五年ごとの改訂編修によっているが、編修上のねらい・方針・配慮に至っては、ほぼ同一のもので貫かれている。例言として述べられている内容も、「新制中等作文」・「現代中等新作文」とともに、ほぼ同じであるが、「中等新作文」に至って、やや詳しくなっている。

作文学習において、趣味を重視し、日常生活に役立つことをねらっていること、さらに上級に至るに従って受験的色彩を濃くしていること、これら三つの点は、編者八波則吉氏の考えを示すものであった。

また、各巻所収の文例は、広く全国各府県に亘って中等学校生徒諸君の作品から採録されており、当該学年の生徒諸君と同じ水準に立って編纂していることとする方針がとられていた。

なお、編修上、学習者への配慮としては、別刷(原稿例、添削例、各種書翰例、日記例等)が示範用に多くとり入れられ、さらに附録についても、各巻ごとにくふうがなされていた。

これらの方針・ねらい・配慮を見ると、各作文教科書は、中等学校用作文副教科書として、自習書・課外読物・受験参考書としての性格を持っていたことがわかる。

## 二

前掲三種類の中等作文教科書の各巻一の構成を見ると、つぎのとおりである。

### 1 「新制中等作文」(昭和5) 巻一の構成

#### 第一 文を作るには

一 決して嘘を書いてはならぬーほんたうの感じーまことこのあら

はれー△僕の作文ー二よくわかるように書かねばならぬー面白  
いよりもよくわかるやうにー作文練習のモットーー△庭球ー  
△制帽ー類題(六)

#### 第二 入学

入学についての出来事や感想ー△似合つてゐる?ー△中学生と  
なつてー類題(七)

#### 第三 花

自然の生命の最も美しいあらはれー詩人の目ー△卯の花(水野  
葉舟)ー△椿ー△ヒヤシンスー△根駸の花ー類題(五)

#### 第四 遠足

△八幡へ遠足ー一遍の報告書のやうなものー要点が浮び出るや  
うにー△駅までー類題(三)

#### 第五 物を見つめて

よく見ることー△文房具ー△ペン先ー△壁ー類題(七)  
第六 動物のさま／＼  
特徴を印象的にー無技巧の技巧ー△象ー△牛ー△百舌鳥ー類題  
(四)

#### 第七 手紙

△母の手紙(相馬御風作の詩)ー文章は談話のかはりー手紙の  
文ーよく分るやうに言ひ表はすことー曖昧な点のないやうに  
ー二相手に快く読ませることー手紙の型ーまことを窺めてー手  
紙を書く時の心得ー△遠地に居る兄へー△都の友にー類題(六)  
第八 葉書文について

簡にして要を得よー内容についてー丁寧に書きー縦書にせよー  
先づ下書してからー月日を記入することー宛名と差出人の住所

氏名―用意周到―△兄さんへ―△海軍の兄さんへ―類題(五)

### 第九 夏休み

自分の体験から材料を選べ―△機関車に乗せて貰ふ―△水泳―

△青年画家―類題(六)

### 第十 句詠法

句詠のいろ／＼―面白い挿話(蒲田泣菫氏「茶話」から)―  
文から転用した符号

### 第十一 写真と絵と文と

写真と絵―文は絵画的でなくてはならぬ―興味の多い作文練習  
のしかた―△山村―△真夜中の川

### 第十二 秋

清新な感じ―季節は感じである―△新秋―△晚秋―類題(六)

### 第十三 整った文

順序よく述べること―統一のあること―△楽地(幸田露伴氏  
「決心録」による)―△名を見つめて―類題(七)

### 第十四 運動競技

運動競技のシーズン―最も熱狂した一場面を選んで―△運動会

―△綱引―△勇ましい勝利の歌―類題(六)

### 第十五 誘ふ、贈る、見舞ふ

一実用の手紙と趣味の手紙―二誘ふ手紙―△野球応援に―類題

(四)―三物を贈る手紙―好意が先方に通ずるやうに―△山芋  
を贈る―類題(六)―四見舞の手紙―形式よりも人情の自然か  
ら出たもの―△弟への病気見舞―△震災見舞―類題(六)

### 第十六 年賀状

年賀状の文句―△先生へ―△叔父へ―△友に―名家の年賀状二

### 三

#### 第十七 日記

文の熟達―練習を重ねること―お役目的の日記―日記と短文―  
日記の一節―△待たるる春―類題(五)

#### 第十八 物に成つて

物の観方―科学的態度と文学的態度―感情の移入―物に成り切  
る―△僕は犬である―△私は石ころである―△案山子の日記―  
類題(六)

#### 第十九 思ひ出

過去の追憶―追憶は話である―△母と蘆(西条八十)―△万年  
筆―類題(三)

#### 第二十 童謡

一童謡とは何か―△親雞子雞(野口雨情)―児童の歌―二童謡  
と感情移入―△蟻(西条八十)―同情―三童謡と擬声・擬容―  
△さるすべり―△えんさかほい―△日の出(葛原しげる)―四  
童謡と方言・訛語―△ねこ―△くり―△五希望と元氣―△見知ら  
ぬ国(ロバート・ルイス・ステイヴンソン)―△海のあるた  
(柳沢健)―△棚(加藤まさを)―童謡創作の標準―歌心

附録 一 自然と入事 二 常用漢字音別表

#### 2 「現代中等新作文」(昭和10)巻一の構成

##### 第一 心のすがた

生きた文―心の底からの声―△小さき詩人―まこと―真情の吐  
露―△野球―△弁当―類題(八)

##### 第二 入学

入学についての出来事や感想―△入学考査―△入学考査の日―  
伸びた文と詰った文―類題(八)

### 第三 手紙

手紙は特別の文章である―目上の人にあげる手紙―△恩師へ―  
△近況を知らず―△類題(六)

### 第四 遠足

要点が浮び出るやうに―△三原山へ―△冷川まで―類題(七)  
第五 物を見つめて

よく見ること―△文房具―△消ゴム―△しづく―類題(二二)  
第六 動物のさまじく

特徴を印象的に―無技巧の技巧―△犬―△雀の声―△金魚―△  
霧―類題(七)

### 第七 花

自然の最も美しいあらはれ―△朝顔(三浦修吾)―詩人の眼―  
△月見草―△コスモス―△お花畑―類題(七)

第八 葉書文について  
簡にして要を得よ―内容について―単刀直入―丁寧にかけ―統  
書にせよ―先づ下書してから―月日を記入すること―宛名と差  
出人の住所氏名―用意周到―△友へ―△海軍の兄さんへ―△都  
の友へ―△兄から弟へ―類題(七)

### 第九 句読法

句読点―△金杓子屋―△数珠(薄田泣重「茶話」)―欧文から  
転用した符号―△やけあとから

### 第十 夏休み

自分の体験から材料を選べ―△水泳―△温泉行―光明の世界へ

### ―類題(七)

### 第十一 写真と絵と文と

写真と絵―文は絵画的でなくてはならぬ―興味の多い作文練習  
のしかた―△夕方の海―△キャンプ―作文の題材として(写真  
六葉)

### 第十二 秋

清新な感じ―季節は感じである―△秋はいくです―△秋の点描  
―類題(二〇)

### 第十三 運動競技

△棒高飛―最も熱狂した一場面を選んで―△勇ましい勝利の歌  
(井手訶六)―類題(九)

### 第十四 文字上の疵

思想と文字―内容と形式―原稿の文字―漢字の誤字又は類字―  
仮名遣の誤謬―送仮名について―異種の仮名

### 第十五 誘ふ手紙と贈る手紙

一実用の手紙と趣味の手紙―二誘ふ手紙―△野球応援に―△水  
源地の見学に誘ふ―類題(五)―三物を贈る手紙―好意が先方  
に通ずるやうに―△恩師に柿を贈る―△写真を贈る―類題(七)

### 第十六 年賀状

△先生へ―△叔父へ―△友へ―名家の年賀状(国木田独歩・石  
川啄木・前田正名)

### 第十七 日記

実用の日記と趣味の日記―生きた人生―△日記例

### 第十八 見舞状と礼状

一見舞状―△病氣見舞―△寒中見舞―△火事見舞―類題(九)

二礼状一早く出すこと一謝意を十分に述べること一礼も過ぎれば却って非礼に当る一手紙は心の姿一△病氣見舞を謝する一△叔父さんへの御礼一△薩摩芋の御礼一類題(五)

#### 第十九 物になつて

物の観方一科学的態度と文学的態度一感情の移入一物に成り切る一△僕は機関車である一△僕は宮門です一△私は停車場の時計である一類題(七)

#### 第二十 電報

簡潔でなければならぬ一略語一指定記号一明確でなければならぬ

附録 一 誤り易い文字上の疵 二 常用漢字音別表

### 3 「中等新作文」(昭和15)巻一の構成

#### 第一 心のかがみ

心のかがみ一生きた文一心の底からの声一人のこゝろのまこと一真情の吐露一△忘れられない嬉しい日入学についての出来事や感想一△発表を待つ一△登校第一日一類題(九)

#### 第二 物を見つめて

芭蕉の句一よく見ること一△朝顔(三浦修吾)一詩人の眼一△ちみぎり草一△机一類題(八)

#### 第三 動物のさまじく

一茶の句一特徴を印象的に一無技巧の技巧一△もず一△金魚一

#### 類題(七)

#### 第四 手紙

△二頁ヶ浦から(加能作次郎)一手紙は特別の文章である一△

出征中の辻さんへ一△写真屋へ一目上の人に上げる手紙一△明兄さんへ一△内地の叔父さんへ一△下宿から父母へ一類題(七)

#### 第五 遠足

△今治へ一要点が浮び出るやうに一△久里浜へ一△頂上まで一類題(五)

#### 第六 葉書

実用の文一簡にして要を得ること一公開してあるつもりで一読み易く丁寧に一縦書にせよ一先づ下書をして一月日を記入すること一宛名は楷書で分り易く一はつきり住所姓名を自署すること一用意周到一△兄へ一△御両親様へ一類題(五)

#### 第七 句読法

句読法一△金杓子屋一△数珠(薄田泣菫「茶話」)一欧文から転用した符号

#### 第八 夏休み

△蟬(著者八波則吉)一自分の体験から新に得た材料で一△売子一△機関車に乗せて貰つて一△夏休小品一類題(五)

#### 第九 文字上の疵

思想と文字一内容と形式一原稿の文字一漢字の誤字又は類字一仮名遣の誤謬一送仮名一異種の仮名

#### 第十 秋

清新な感じ一△朝の道一△初秋の一日一△雨の晴れた夜一類題(九)

#### 第十一 運動競技

最も熱狂した一場面を選んで一△運動会一△リレー一△走高跳一△類題(九)

第十二 伸びた文と詰った文

△本田重次(著者八波則吉)―口語文―武道大会―△剣道大会

―△一念―類題(四)

第十三 誘ふ手紙と贈る手紙

実用の手紙と趣味の手紙―誘ふ手紙―△野球応援に―△水源

地の見学に誘ふ―類題(五)―二物を贈る手紙―好意が先方に

通ずるやうに―△果物に添へて―△写真を贈る―類題(五)

第十四 年賀状

ゆったりした気分―年賀状の書き方―△先生へ―△叔父へ―△

祖母へ―△名家の年賀状(石川啄木・河東碧梧桐・菊池幽芳)

第十五 日記

文の熟達―練習を重ねること―お役目的の日記―日記と短文―

実用の日記と趣味の日記―生きた人生―△作例

第十六 見舞状と礼状

一見舞状―暑さ・寒さの見舞―病氣見舞―災害見舞―類題(五)

―二礼状―早く出すこと―礼も過ぎれば却って非礼に当る―手

紙は心の鏡―△叔父さんへ―御礼―類題(三)

第十七 敬語と談語

敬語―△先生―△父―談語―△いろはの先生(著者八波則吉)

―類題(三)

第十八 和歌と俳句

日本文学の特徴―真情の流露―中心を何処に置るか―△作例

(和歌・俳句)

附録 一 常用漢字音別表 二 誤り易い文字上の疵

以上、各巻の内容は、各課ごとに、主題(文章作法・文章形態・

文章材料(内容V)に關しての文話・文例・類題から組み立てられていた。文話の中にも、既成の作家等の文章や作品が例文として採られていたし、文例にも生徒の作文例・作品例のほか、専門家の文章・作品が収められていた。「中等新作文」には、編著者八波則吉氏の自作の文言も採録されていた。(△印は作例を示す。)

いま、三種類の巻一の構成を、課単位で比べてみると、つぎのとおりである。

課	書名	
	「新制中等作文」 巻一	「現代中等新作文」 巻一
1	文を作るには	心のがた
2	入学	入学
3	花	手紙
4	遠足	遠足
5	物を見つめて	物を見つめて
6	動物のさまざま	動物のさまざま
7	手紙	花
8	葉書文について	葉書文について
9	夏休み	句読法
10	句読法	夏休み
11	写真と絵と文と	写真と絵と文と
12	秋	秋
13	整った文	運動競技
		「中等新作文」巻一
		心のかぎみ
		物を見つめて
		動物のさまざま
		手紙
		遠足
		葉書
		句読法
		夏休み
		文字上の疵
		秋
		運動競技
		伸びた文と詰った文
		誘ふ手紙と贈る手紙

14	運動競技	文字上の楨	年賀状
15	誘ふ、贈る、見舞ふ	誘ふ手紙と贈る手紙	日記
16	年賀状	年賀状	見舞状と礼状
17	日記	日記	敬語と讓語
18	物に成つて	見舞状と礼状	和歌と俳句
19	思ひ出	物に成つて	
20	童謡	電報	
附	一自然と人事	一四り多い文字上の楨	一常用漢字音別表
録	二常用漢字音別表	二常用漢字音別表	二四り多い文字上の楨

分量としては、「新制中等作文」(昭和5)巻一が本文・附録あわせて、菊判一七五ページ、「現代中等新作文」(昭和10)巻一が本文・附録あわせて、菊判一七六ページ、「中等新作文」(昭和15)巻一も、本文・附録あわせて、菊判一七六ページである。  
各課の配列は、三種類とも、入学当初↓夏休み↓第二学期(秋)↓正月↓というように、学校行事・季節の推移を考慮に入れてなされている。

三

前掲三種類の作文教科書のうち、「現代中等新作文」全五巻(昭和10)を例として、巻二から巻五までの構成を示すと、つぎのとおりである。

2'

「現代中等新作文」(昭和10)巻二の構成

第一 春

▲蝶のこぼばー▲進級してー▲高きに登るー▲新入当時は懐かしいー類題(八)

第二 写生

写生又はスケッチー▲鯉のぼりー特徴をつかめー▲試合ー▲老いた雞ー蕪村の句ー▲芽ー▲燕ー▲雄吉ー▲青空を飛ぶー類題(七)

第三 家族の一人

随意選題か課題かー▲僕の親父ー▲弟ー▲兄ー類題(一三)

第四 問合せの手紙と通知の手紙

一問合せの手紙ー▲住所の問合せー▲書物の有無を問合せるー▲差支の有無につき問合せるー▲右の返事ー類題(五)一二通知の手紙ー▲転居のしらせー▲安着のしらせー▲父の病気を兄に知らずー類題(五)

第五 ぼつと出主義

ぼつと出主義ー実用の文と趣味の文ーぼつと引込める主義ー▲完成へー▲安堵ー▲足ー▲ラッシュアワーー類題(一〇)

第六 真に迫る

物真似師と田舎者ー真に迫るー▲筍ー絵空言ー▲驟雨ー▲夕立ー▲巷に見るー▲人気者ー類題(一一)

第七 近況を知らず手紙

「倫敦消息」(夏目漱石)ー▲旅の父へー▲故郷の母へー類題(五)

第八 自分をあらはせ

名文とは何かー自分をあらはせー初一念を貫へー▲正男の日記ー独自の事実ー▲Thank youー▲弁論大会ー▲祖母の死ー

類題 (一一)

第九 敬語と讓語

敬語—△先生—△夕食のとき—讓語—△先生—△先生—△名文の手紙—類題 (七)

第十 注文と依頼

一 注文の手紙—△雑誌の注文—△擊剣道具の注文—△見本の注文—類題 (四) —二 依頼の手紙—△在京の友に買物を頼む—△医師に來診を頼む—類題 (六)

第十一 文の統一

思想の統一—文章と金米糖—文の主旨—詞藻—△秋祭—△経験と想像—文体の統一—△しゃくにさはったこと—二つ—△幸福—米の飯にまじつてゐる砂のやう—類題 (九)

第十二 秋の虫

虫の文学—△茶立虫 (薄田泣重) —△蟋蟀—△赤とんぼ—△馬追—△蓑虫—類題 (七)

第十三 歳暮から新年へ

歳暮と正月—△寄せ書—△赤字の年末—類題 (七)

第十四 整つた文

順序よく述べること—統一あること—△楽地 (幸田露伴) —△顔—△何れか長何れか短—△涙—類題 (五)

第十五 伝説

△大根川—△長峯村の人柱—類題 (五)

第十六 候文

相手を知る—△手紙五例 (藤岡東圃) —候文の用—候文の様式—候文を書く者の常弊

附録 一 手紙用語例 二 常用漢字音別表

2' 「現代中等新作文」 (昭和10) 卷三の構成

第一 文は人

文は人なり—△「僕はかう思ふ」—人格の反映—文章の基礎—類題 (八)

第二 天象地象

空—雲—風—雨—山—水—△北国の海—△美しい高山の朝—類題 (九)

第三 夢

夢十夜—更級日記—△夢「一」—△夢「二」—△夢「三」—△夢の旅—類題 (三)

第四 断りの手紙と詫びの手紙

一 断りの手紙—露骨を避けること—婉曲法—△誘引を断る—△新築祝不参の断り—類題 (五) —二 詫びの手紙—至誠の発露—手紙は人格の表現—△無駄足をさせたわび—△粗製品についての弁解—△違約のわび—類題 (三)

第五 和歌・俳句から文へ

和歌と俳句—主旨を捉へよ—△生徒作の鑑賞文 (三) —類題 (和歌・俳句各三)

第六 故郷

啄木の歌—△我が里—△ふるさと—△五泉のはこり—類題 (五)

第七 対話

独演体の文章—独演から対話へ—△床屋 (夏目漱石「草枕」)—対話の呼吸—台詞渡—△兄弟—△二人の児童—類題 (七)

第八 旅

見聞を広めよー叙景と個性ー△初夏の雲仙(著者八波則吉)ー  
△中禅寺湖ー全殿山ー△江の島ー△旅の印象ー類題(一一)

第九 招待の手紙

△招待状(八波則吉氏宛)ー△同返事ー招待状に必要な条件ー  
儀式用の招待状ー△祭礼に招くー△米寿の祝に招くー△右の返  
事ー△新築移転の披露ー類題(五)

第十 伝記

△母の鞭撻(著者八波則吉)ー△ムッソリーニー△フォードー  
△少年職工ー類題(五)

第十一 思ひ出

△玩具の舟(西条八十)ー過去の追憶ー追憶は詩であるー△幼  
時の思ひ出(著者八波則吉)ー△思ひ出(一)ー△思ひ出(二)  
ー類題(三)

第十二 催促の手紙

売言葉に買言葉ー△寄附金の催促ー△代金支払の催促ー類題  
(三)

第十三 春待つ心

△暖い雨(島崎藤村)ー△春ー類題(五)

第十四 都会と田舎

△都会と田舎(萩原朔太郎)ー△都会のデッサン田舎のスケツ  
チー類題(五)

第十五 体験を語る

△生徒作ー△熱中の快味ー△汗の体験ー△柔道ー類題(五)

附録 一 自然と人事 二 常用漢字音別表

2 「現代中等新作文」(昭和10) 卷四の構成

第一 自己を見つめて

千古の謎ー自己の発見ー△反省ー△其の日の心境の変化ー類題  
(一、二、三)の巻から、類題としては、たとえば、○自己(昭和  
六・静高)のように、高等諸学校の入学試験に出題された、作  
文の題が掲げられている。

第二 含蓄

含蓄ー含蓄のある文章ー△文を練るー弾力に富んだ文章ー△馬  
を通してー類題(一一)

第三 詩を文に

その場面をはつきり認めよー△詩集の中から(井上康文)ー△  
その感想文ー△私の村(尾崎喜八)ー△その感想文ー△一軒家  
(三木露風)ー△その感想文ー類題(富田碎花・野口米次郎両  
氏の詩)

第四 勧誘と申込

一 勧誘の手紙ー△講習会に出席勧誘ー△右の返事ー△出資の勧  
誘ー二 申込の手紙ー△広告掲載の申込ー△書物を借りー類題  
(四)

第五 人物描写

一 性格描写ー個性の描写ー二 外面描写ー容貌・風采の描写ー表  
情・挙動・態度の描写ー三 内面描写ー内面描写又は心理描写ー  
△男種々相ー類題(七)

第六 名文を写せ

作者が筆者に乗り移るー△土(長塚節)ー類題(七)

第七 結論から

先づ結論から言へー△吾が嗜好△第三の文明△青年の本領ー類題(九)

第八 慰めと激励の手紙

△年少の友へ送る手紙△慰問状△受験準備中の友を激励する文ー類題(六)

第九 文章の山

△九十九里(徳富蘆花)△銃剣△彫物の欠点△相撲ー類題(九)

第十 読後の感

△「文鳥」を読んで△最近に読んだ本ー類題(七)

第十一 余韻余情

想像の余地△花十二題△秋五題ー類題(二〇)

第十二 祝と悔み

一祝の手紙△合格を祝ふ(大町桂月)△赤ん坊が生れてお目出度う(夏目漱石)△卒業生を送る△悔みの手紙△御霊前に(有島武郎)△追悼の吟に添へて(尾崎紅葉)ー類題(五)

第十三 文に成るまで

△三人の賤(著者八波則吉)△換骨奪胎△河内の里ー類題(四、ただし、これらは入試に出題されたものではない。)

第十四 願書と届書

△書式(八例)

附録 一 高等諸学校入学試験作文文題類別表 二 常用漢字音

別表

2 「現代中等新作文」(昭和10)巻五の構成

第一 人生

△人生は?△輝かしき前途△芽ー類題(九、類題の出所は、巻四のばあいに同じ。)

第二 肉親の賦

△親△父ー類題(四)

第三 大家の苦心

芭蕉の苦心△推敲△一茶と蛙ー類題(二)

第四 忠告の手紙

忠告の手紙の書き方△弟に忠告する手紙△心を大きくせよ△青年を諭すー類題(五)

第五 学術を説く

△地球の心は鍛げた鉄とニッケル△数理△自由律短歌に就いてー類題(二〇)

第六 偶感

△心と心△雑記帳からー類題(七)

第七 文の背景

△忘れえぬ人々(国木田独歩)其の一ー其の二ー其の三ー背景と事件との調和△試験勉強△追憶ー類題(三)

第八 紹介状

△同郷人の紹介△社員紹介△店主に少年を紹介推薦すー類題(五)

第九 文体の種類(一)

莖符体と簡潔体△波の音(国木田独歩)△武蔵野(国木田独歩)△落葉(島崎藤村)△スキーー類題(八)

第十 文体の種類(二)

乾燥体と華麗体―△浮雲―類題(五)

第十一 文体の種類(三)

情感の文と和解の文―△知と愛(西田幾多郎)―△責任観念―

△武道精神―類題(六)

第十二 卒業を前にしての手紙

△履歷書を送るに添へて―△前途のために―類題(六)

第十三 作者の位置

事件と作者と読者―説明体―△十年後の我―自叙伝体―△十年

後のある日―説明体と自叙伝体との優劣―説明体が自叙伝体

に移るまでの階梯―隨化法―現在法―対話法―對話挿入の説明

体―作者の気転―類題(五)

第十四 世界の一人として

△中華民国中学生に送る書―△太平洋―類題(六)

第十五 履歷書

第十六 式辞

△創立十周年記念式祝辞―△弔辞―△卒業式答辞―類題(五)

附録 一 高等諸学校入学試験作文文題類列表 二 常用漢字音

別表

上來掲げた巻一から巻五までの「現代中等新作文」の各課の題目  
を表示すると、つぎのとおりである。

1	課	卷
心のがた春	卷一	卷一
文は人	卷二	卷二
自己を見つめて	卷三	卷三
人生	卷四	卷四
	卷五	卷五

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
電報	見舞状と礼状物になつて	日記	年賀状	誘ふ手紙と贈る手紙	文字上の研	運動競技	秋	写真と絵と文	夏休み	句読法	葉書文につ	花	動物のさま	物を見つめ	遠足	手紙	入学	
				候文	伝説	歳暮から新年へ	秋の虫	文の統一	注文と依頼	敬語と譲語	自分をあらはす手紙	近況を知らす手紙	真に迫る	ぼつと出主	問ひ合せの手紙と通知の手紙	家族の一人	写生	
					都会と田舎	春待つ心	催促の手紙	思ひ出	伝記	招待の手紙	旅	対話	故郷	和歌・俳句	断りの手紙と詫	夢	天象象	
					願書と届書	祝と悔み	余韻余情	余韻余情	読後の感	文章の山	慰めと激励	結論から	名文を写せ	人物描写	勸誘と申込	詩を文に	含蓄	
				式辞	世界の人として	卒業を前にしての手紙	文体の種類	文体の種類	文体の種類	文体の種類	文体の種類	文体の種類	偶感	忠告の手紙	肉親の賦	大家の苦心		

「現代中等新作文」全五巻は、計八一課から構成されているが、

その内容は、

Ⅰ 作文の基礎事項の系列（句読法、文の統一、文章の山、文の背景、文体の種類など）約二〇課

Ⅱ 文章作法（書かせかた）の系列（物を見つめて、物になつて、写生、読後の感など）約二〇課

Ⅲ 文章の素材・内容の系列（入学、遠足、家族の一人、春待つ心、世界の一人としてなど）約二〇課

Ⅳ 手紙など実用文に関する系列（各種手紙のほか、電報、式辞、履歴書、願書と届書など）約二〇課

このように見れば、「現代中等新作文」全五巻の内容は、かなりに豊かであつて、その組織の骨組みも確かであり、文話・実例（生徒作）・範例（编者および専門家）・類題なども巧みに組み合わせられていたことがわかる。

#### 四

前掲全五巻所収八一課の中で、異色なのは、巻二第五課の「ぼつと出主義」である。この課は、つぎのように説述されている。

趣味の文章は「ぼつと出主義」が面白いやうである。

ぼつと出主義？

とは読んで字の如くぼつと出る主義である。読者に何等の予期を与へず、思ひ寄らない辺からぼつと書き出す主義である。

萩の根本へ飛び込んだボールを拾はうとした僕は、思はず「あつ」と叫んだ。

変なものがある。

かう書き出されると、一体これは何を書いたものであらうと、是

非ともその先を読んで見たくなる。

そのつゞきはかうである。

よく見ると大きな囊だ。ボールは丁度囊のそばにあるので、気味が悪くて手が出せない。早く動かないかと睨めつけてやつたが、びくともしないで、却つて僕の顔を睨めてゐる。「おーい、どうした」。毬投げの相手の友の声だ。僕は返事もしないで囊を見てゐる。そして「ボールが飛んで来ても、人間が睨めても勇敢に動かない。囊は偉いものだ」と僕は感心した時、やつと少し頭をもたげた。それから相交らず横柄な顔つきで悠然と動き出した。僕はボールを拾うことも忘れて、ぼんやりと彼を見送つた。（宮地生）これで終つてゐる。このやうに、ぼつと出しぬげに書き出して読者の心を描へるのが、所謂ぼつと出主義である。

もしこの文が、

ボールの飛んだ萩の根本に、大きな囊がゐた。……

とでも書き出してあつたらどうであらう。すつかり読者の好奇心を殺いでしまつて、全く平凡な文になつたであらう。

富士一つ埋み残して若葉かな 蕪村

ぬつと富士山が若葉の中に身を挺出てる雄姿が、如何にも若葉の若々しい「力」を語つてゐるやうで、痛快な句である。富士山といへば、初めて西の国から上京した時、静岡県へかゝつて間もなく、一つの隧、道を出た瞬間駿河湾を隔て、遙かに富士の雄峯を望んで、思はず脱帽した事を憶ひ出す。富士山、富士山、それは出立前から念頭を離れぬ期待であつたが、まさか此処から拜めようとは、全く思ひもよらぬ「ぼつと出主義」の実現であつた。

しかし、「ぼつと出主義」の文章は、一読直ちに真味を解する訳

に行かない場合が間々ある。従つて忙しい人には不向である。至急の用件には無論駄目である。

文を大別すれば、

(一) 実用の文

(二) 趣味の文

の二種類となる。実用の文は主に智に訴へ趣味の文は主に情に訴へる。智に訴へるものは同感を求める。理解を求める為には明晰を貫び、同感を惹く為には刺戟が必要である。それで「趣味の文章はぼつと出主義が面白い」と、わざと「趣味の文章」と条件付にしたのである。要は適所に適法を当嵌めるにある。

ぼつと出た文章は、又ぼつと引込めたものだ。これによつて、その文は簡潔に片づき、しかも印象はつよくなる。前の「藝」の文も、

僕はボールを拾ふことも忘れて、ぼんやりと彼を見送つた。

と、ぼつと引込めたところに、余韻がこもつてゐる。(同上書巻二、三六―四〇頁)

わたくしは、昭和八年(一九三三)四月から昭和十三年(一九三八)三月まで、旧制中学校で学んだひとりであるが、当時、作文の時間に、担当の国語科の先生から、「ぼつと出主義」ということばを聴いたおぼえがある。そのことばの出所は、八波則吉氏の所論にあることを知つたのは、ずっと後のことであつた。

また八波則吉氏は、同じ巻二巻三「家族の一人」において、「隨意選題か課題か」の問題に言及して、つぎのように迷っている。

元来、文章を上手に書くやうになるには、隨意選題がよいか、

課題、がよいか——これは我が国の文章界で随分やかましい問題になつてゐるが、どちらにも一長一短がある。今、課題の長所をいへば、

第一 皆が同一題目で書いてゐるから、成績の甲乙がはつきり分る。例えば「家族の一人」といふ題が課せられれば、皆「家族の一人」といふ狭い範囲内で文を作るから、十人十色、千人千種の隨意選題に比すれば、出来不出来がはつきり分る。で、選抜試験のやうに等差をつける必要がある場合は、必ず課題に限られてゐる。

第二 作者に取つて、今度は何事を書かうか、あれにしようか、これにしようかと、執筆前に時間を空費することなく、専心一題に没頭して想を纏める便利がある。隨意選題又は自由作は、名は隨意であり自由であつても、その実は余りに範囲が広すぎで、却つて不自由を感じることがある。

第三 成績発表の際、作者自身に自作の地位を知らせ、反省の機会を与へる。「家族の一人」の場合に就いていふならば、多くは父・母・叔父・兄・姉・弟などに就いて書くから、発表された成績に由つて、作者自身に、自作と他作との比較が出来る。即ち、自分が書いた「弟」は、秀逸作とせられた「弟」に比して、何処に欠点があつたか? などと内省することが出来る。これが非常に大切な練習となり又修養となるもので、最初に見た時は、自作の方が秀逸作よりもよいやうに思はれることもあらうが、気を落ちつけて、虚心坦懐に見直す時は、おのづから発表された他作の優秀な所以を会得することが出来る。これが作者に取つて課題作が与へる最大の利得であると思ふ。

総じて、自分で苦しまなければ、他人の苦しみは分らないものである。自分が考へても出来なかつたことを、他人が見事に造つて退けてゐるとか、自分も相当に深く考へたつもりだったが、他人の方がより深く考へてゐるとか思ひ当つて、心中秘かに敬意を払ふことは、修養上にも亦大切な事である。(同上書卷二、一九—二二ペ)

随意選題(芦田恵之助の提唱にかかる)か課題(練習目的論)

(友納友次郎の主張にかかる)かの論争は、すでに大正中期から初等綴り方教授界においてなされたことであつたが、八波則吉氏は、それらについてそれぞれの長短を冷静に見きわめる立場から、課題方式の長所を指摘し、支持している。もともと中等作文教科書は、課題方式を拠点として成り立っており、そこから応用・発展が図られていた。

## 五

さて、「現代中等新作文」(昭和10)巻四・巻五には、附録として、「<sup>高等綴り方</sup>入学試験 作文文題別表」が収めてあつた。旧制高等学校・専門学校の入学試験に課せられていた作文の文題を、(一)自然を主とする問題、(二)自己を中心とする問題、(三)国家社会を中心とする問題、(四)道德修養に関する問題、(五)感想評論等の問題、(六)手紙の文、(七)雑の七つにわけて、昭和年間のものに限って掲げられているのである。

いま、それらを類別順に掲げると、つぎのとおりである。

(一) 自然を主とする問題

○煙(京城工、昭和2)／○冬枯(広島高師、昭和2)／○光(浪高・静高・弘高、昭和3、7、9)／○冬の朝(東京高師、昭和3)／○山路(広島高師、昭和3)／○大空(陸士、昭和

3)／○水(広島高・七高・広島高師、昭和3、5、7)／○春の光(八高、昭和4)／○風景(静高、昭和5)／○波(山口高、昭和5)／○春宵雜感(台北商、昭和5)／○海と川(水産、昭和5)／○春(二高、昭和6)／○早春の一日(松本高、台北大、昭和6)／○雨(広島高師、昭和6)／○冬の夜(東京高師、昭和6)／○旅(山口高・佐高・松江高、昭和4、7、9)／○土(東農大、昭和6)／○太陽(京城工、昭和7)／○野(東農大、昭和7)／○朝(七高、昭和8)／○自然の恩(大高、昭和8)／○早春(京城大、昭和8)／○朝日(東女師、昭和8)／○山と海(東船、昭和8)／○海(海機、昭和9)

(二) 自己を中心とする問題

○既往の生活を見る(富高、昭和2)／○私の過去と将来の希望(名商、昭和2)／○中等学校時代の感想(熊工、昭和2)／○私の周囲(奈女師、昭和2)／○忘れ得ぬ思ひ出(福工、昭和2)／○我が生立(浜工・一高、昭和2、7)／○我が生活(七高・姫高、昭和3)／○自分の抱負(佐高・水産、昭和3)／○わが好む人物(浦高、昭和3)／○吾が理想の学生生活(富高、昭和3)／○私の誇(名商、昭和3)／○私淑する人(弘高、昭和3)／○余が正しと信ずる生活(神宮、昭和3)／○願はしいこと(東女大、昭和3)／○試験の前日(五高、昭和4)／○恩師の印象(水農、昭和4)／○わが家の人々とその生活(台北高、昭和4)／○わが感激の思ひ出(台北高、昭和4)／○我が崇敬する偉人(富高、昭和4)／○受験前の一箇年を顧みて(京城商、昭和4)／○我等の理想(東音、昭和4)／○己が確信(慶大予、昭和4)／○わが願(早高、昭和4)／○私の趣味

(京城医・大分商、昭和5、8) / ○自信の力(筑豊鉱、昭和5) / ○高校生活に対する私の期待(富高、昭和5) / ○志望科類を決定するまでにどんな事を考慮したか(台北高、昭和5) / ○我が敬愛する人物(佐高、昭和5) / ○我が修学の方法とその得失(新潟高、昭和5) / ○特に高等学校へ入学志願した理由(六高、昭和5) / ○日記帖(広高、昭和5) / ○父母(二高、昭和5) / ○わが過去(四高、昭和5) / ○自己を語る(北大・大外語、昭和5、9) / ○夢(五高・台北商、昭和5、9) / ○商人とその覚悟(台北商、昭和5) / ○己が過去を顧みて(広高、昭和5) / ○吾が理想(満医大・東外大、昭和5、6) / ○過去を顧みて(水高・中央大、昭和4、5) / ○私と私の周囲(水高、昭和6) / ○自己(静高、昭和6) / ○我が責務(浪高、昭和6) / ○余の最も感ずる事(佐高、昭和6) / ○我が信念(名商、昭和6) / ○わが畏敬する人物(福島商、昭和6) / ○己を省みて(学習院、昭和6) / ○我が志望(慶大予、昭和6) / ○忘れ得ぬ人(早高、昭和6) / ○我が経歴中特筆すべき一節(京城医、昭和6) / ○高等学校を志望せし理由(富高、昭和7) / ○各自の思ふまゝを述べよ(大高、昭和7) / ○予の最も愉快に感ずる事(佐高、昭和7) / ○幼年時代の思ひ出(六高、昭和7) / ○我が過去と現在(七高、昭和7) / ○我が愛読書(松江高、昭和7) / ○我が崇拜する人物(松江高、昭和7) / ○我が少年の頃(東京高師、昭和7) / ○忘れ得ぬ書籍又は文章(東女師、昭和7) / ○余が日常生活(福島商、昭和7) / ○癖(台北商、昭和7) / ○私にとつて貴い体験(京城医、昭和7) / ○母校の思ひ出(京城大、昭和7) / ○楽しかりし日(佐

高、昭和8) / ○わが学びたき人(水高、昭和8) / ○思ひ出のことも(松本高、昭和8) / ○わが書斎(松山高、昭和8) / ○吾人の覚悟(台南工、昭和8) / ○今秋の思ひ出(広島高師、昭和8) / ○我が郷土(慶大予、昭和8) / ○強い感動を受けた経験に就いて(大外語、昭和8) / ○念願(二高、昭和9) / ○此の頃の感想(四高、昭和9) / ○うれしかった事(五高、昭和9) / ○我が過去を顧みて(台北高、昭和9) / ○我等の進むべき道(福島商、昭和9) / ○私の癖(高岡商、昭和9) / ○父又は母、兄、姉、弟、妹、旧師、我が家、我が母校)と私(京城医、昭和9)

② 国家社会を中心とする問題

○理代青年の意気(海機、昭和2) / ○国民性(各高、昭和2) / ○時代精神(各高、昭和2) / ○明治節(成蹊、昭和2) / ○国民皆兵論(海兵、昭和2) / ○昭和の世に処して(高松商、昭和2) / ○社会と公德(横商、昭和2) / ○今後日本国民の歩むべき道(旅工、昭和2) / ○行け! 海の外へ(神船、昭和2) / ○現代の社会に対する我が感想(早高、昭和2) / ○海国の幸(水産、昭和2) / ○昭和時代と日本国民(大外語、昭和2) / ○現代と吾等(成蹊、昭和3) / ○産業(山梨工、昭和3) / ○日本の将来と青年の覚悟とを論ず(海兵、昭和3) / ○亜細亜の将来(大外語、昭和3) / ○軍備(海機、昭和3) / ○日本国民の理想(大高、昭和4) / ○日本人(福岡、昭和4) / ○東洋と西洋(静高、昭和4) / ○我が国史観(長崎商、昭和4) / ○東北地方(福島商、昭和4) / ○帝国の南端に立ちて(台北商、昭和4) / ○社会奉仕(金沢工、昭和4) / ○我が建国の精神(東大農、昭和4) / ○國を富ます道(水産、昭和4) / ○我が親たる

現代日本（陸士、昭和4）／○神州男子の覚悟（海機、昭和4）／  
 ○世界に於ける我が帝国の地位（山口商、昭和5）／○交通（福  
 高、昭和5）／○紀元節（大高、昭和5）／○現代の世相をなが  
 めて（名商、昭和5）／○社会（松山商、昭和5）／○昭和青年の  
 覚悟（福島商、昭和5）／○東洋民族の将来（日大、昭和5）／  
 ○我等の国民的使命（東外語、昭和5）／○就職難時代に処する  
 の覚悟（大外語、昭和5）／○我が国体の精華と吾人の覚悟（海  
 兵、昭和5）／○日本の将来（姫高、昭和6）／○将来に対する  
 我等の覚悟（富高、昭和6）／○明治から昭和へ（山口高、昭和  
 6）／○我が国体の精華に就て（松山商、昭和6）／○現代（海  
 経、昭和6）／○現代の偉人（北大予、昭和6）／○家（東女  
 師、昭和6）／○国（松山高、昭和7）／○祖国愛（水高、昭和  
 7）／○国防（山口高、昭和7）／○日本（七高、昭和7）／○  
 時局に対する青年の覚悟（山口商、昭和7）／○今日の日本（浪  
 高、昭和7）／○吾人青年の覚悟（東商大、昭和7）／○學園一  
 致（明専、昭和7）／○我が国軍人の忠勇無比なる所以（神船、  
 昭和7）／○吾人の覚悟（満洲医、昭和7）／○現代学徒として  
 の覚悟（台北大、昭和7）／○時局に対する感想（早高、昭和  
 7）／○国家と青年（二高、昭和8）／○団体生活（佐高、昭和  
 8）／○社会と自分（北大予、昭和8）／○青年の覚悟（台北  
 商、昭和8）／○大和民族の世界的使命（東外大、昭和8）／○  
 日本精神（八高、昭和9）／○三千年の国史を顧みて（大高、昭  
 和9）／○皇国の将来と吾人の覚悟（新潟高、昭和9）／○非常  
 時（松江高、昭和9）／○偉人（静高、昭和9）／○国史を読み  
 て（水高、昭和9）／○大楠公を偲ぶ（山口高、昭和9）／○明

治時代（東高、昭和9）／○日本精神の真髓（大分商、昭和9）  
 ○社会生活と秩序（小樽商、昭和9）／○日本の女子（奈女師、  
 昭和9）／○現代日本の要求する人物（慶大予、昭和9）

四 道德修養に関する問題

○師恩に就て（東船、昭和2）／○愛好する金言（東外語、昭和  
 2）／○感謝（東女師、昭和2）／○実力養成の工夫（山口高、  
 昭和2）／○友情（京城大・広島高師、昭和2、6）／○内省の  
 力（八高、昭和3）／○共存共栄（京城商・名商・桐工、昭和  
 2、4、4、）／○人生と信用（東商大、昭和3）／○道（水  
 高・広島高師・奈女師、昭和3、5、5）／○正しきを行ふ勇氣  
 に就いて（山梨工、昭和3）／○信は万事の本なり（松山商、昭  
 和3）／○人事と天命（大外語、昭和3）／○人無遠慮必有近憂  
 （新潟高、昭和3）／○自治心公共心（神商、昭和3）／○恩  
 （浦高、昭和4）／○健康と人生（山口商、昭和4）／○反省  
 （高知高・金工・松本高・北大予、昭和4、6、9、9）／○自  
 由と公德（横商、昭和4）／○父母の恩（旅工、昭和4）／○寛  
 容と共同生活に就いて（東船、昭和4）／○憂ふべきは浮薄軽佻  
 の悪風なり（神船、昭和4）／○第一步（旅工、昭和5）／○責  
 任感（八高、昭和5）／○共同生活（松本高、昭和5）／○希望  
 （東京高師、昭和5）／○信用（東女師・台北高、昭和5、6）  
 ○朋友（千葉・和商、昭和5、6）／○敬神崇祖（陸士、昭和  
 5）／○國民道德に就て（東船、昭和5）／○千邪不如一直（京都  
 薬、昭和5）／○感謝（四高、昭和6）／○勤勞（八高、昭和  
 6）／○内省（新潟高、昭和6）／○青年の元氣（松江高、昭和  
 6）／○教育勅語を読み奉りて（大高、昭和6）／○信（東女

師、昭和6) / ○青年時代と心身の鍛錬(神船、昭和6) / ○克己(八高、昭和7) / ○礼儀(東高、昭和7) / ○目標(四高、昭和7) / ○責任(東女師、昭和7) / ○報恩(小樽商、昭和7) / ○正義(東商大・八高、昭和7、8) / ○友(海機、昭和7) / ○責任観念(学習院、昭和7) / ○経験(四高、昭和8) / ○祖先(東高、昭和8) / ○奉公の精神(東商大、昭和8) / ○進取の気象(東商専、昭和8) / ○情誼(名商、昭和8) / ○人の真価(新潟高、昭和9) / ○至誠(東商専・水産、昭和9) / ○勤勞の精神(東商専、昭和9) / ○努力(台北商、昭和9) / ○鍛鍊(陸士、昭和9) / ○誠(東外語、昭和9) / ○学生の本分(同志予、昭和9) / ○聖賢の教に親しめ(神船、昭和9)

四 感想評論等の問題

○人生(山梨工、昭和2) / ○農学と科学(東大農、昭和2) / ○言語(陸士・七高、昭和2、4) / ○都会(北大農、昭和2) / ○流行(一高、昭和3) / ○運動競技所感(六高、昭和3) / ○創造(京城工、昭和3) / ○学友(松本高、昭和3) / ○今と昔(松山高、昭和3) / ○過去一ヶ年を顧みて(松江高・新潟高、昭和3、4) / ○意義ある生活(大高、昭和3) / ○交通機関(北大、昭和3) / ○科学的精神(金工、昭和3) / ○故郷(旅工・新潟高、昭和3、7) / ○土(東大農、昭和3) / ○運動の目的に就いて(東船、昭和3) / ○趣味(六高、昭和4) / ○時(松本高・広高・奈女師・福高、昭和4、4、4、9) / ○現代の学生(佐高、昭和4) / ○模倣(北大予、昭和4) / ○童心(広島高師、昭和4) / ○米(東女師、昭和4) / ○運動精神に就て(松山商、昭和4) / ○田園と都市(水農、昭和4) / ○

旅行の趣味(海兵、昭和4) / ○近代学生の思潮(広高、昭和4) / ○入学難(同志予、昭和4) / ○衣食住(松山高、昭和5) / ○学生生活(同志予、昭和5) / ○我等は何故に学ぶか(早高、昭和5) / ○充実せる生活(学習院、昭和5) / ○独創と模倣(金工、昭和5) / ○自由と平等(水農、昭和5) / ○時かぬ種は生えぬ(広高、昭和6) / ○力(静高・弘高、昭和3、6) / ○趣味に生きよ(台北商、昭和6) / ○新聞(満洲医・東船・海機、昭和6、7、8) / ○明(京城工、昭和6) / ○生命(福高、昭和7) / ○機械(弘高、昭和7) / ○発明心とは何ぞや(神工、昭和7) / ○此の世を如何に見るか(早高、昭和7) / ○感激(陸士、昭和7) / ○読書(山口高、昭和8) / ○家庭(台北商、昭和8) / ○更生(京城工、昭和8) / ○美術の社会的使命を論ず(横工、昭和8) / ○人(陸士、昭和8) / ○受験生活につきて(二高、昭和9) / ○科学の力(佐高、昭和9) / ○学問と職業(山口商、昭和9) / ○運動(東京女師、昭和9)

四 手紙の文

○自己の志望を述べて長上の教示を乞ふ文(広島高、昭和2) / ○入学試験に失敗したる同学の友人に与ふる文(横商、昭和2) / ○将来の方針に就き、旧師に相談する文(名商、昭和3) / ○高商入学の志望を述べて父母の了解を求むる手紙(福島商、昭和3) / ○怠惰の友を戒む(神船、昭和3) / ○農村の青年に告ぐ(東蚕、昭和3) / ○高等師範学校入学志望の覚悟を旧師に報ずる文(広島高師、昭和4) / ○受験第一日の感想を先輩に報ずる文(候文)(名商、昭和4) / ○横浜市に対する感想を友人に報ずる文(横商、昭和4) / ○所志を郷里の兄に告ぐ(台北商、昭

和4) / ○南米に移住する友人に送る(東蚕、昭和4) / ○受験の状況を報ず(水高、昭和5) / ○海外に移住せんとする友を激励する文(候文)(名商、昭和5) / ○国産愛用を友人に勧むる文(候文)(名商、昭和6) / ○郷里の状況を入管中の友人に報知する文(東蚕、昭和6) / ○受験地より旧友へ(京城大、昭和6) / ○海外視察に赴く恩師に呈する文(候文)(名商、昭和7) / ○受験地より(福島商、昭和7) / ○満蒙出征の先輩に贈る(福島商、昭和7) / ○旧師に近況を報告する文(東船・六高、昭和7、8) / ○在滿將士に(五高、昭和8) / ○最近の消息を先輩に報ずる文(名商、昭和8) / ○先輩にその在学中の学校の様子を尋ぬる文(六高、昭和9)

(4) 雑

○次ノ歌ヲ読ンテ印象ヲ一ツノ文ニマトメテクレタマヘ「各自適当ナ題ヲツケテ」すくく」と生ひたつ表に腹すりて燕とびくる春の山畑(山口高、昭和3) / ○次ノ俳句ト和歌トノソレゾレニヨリテ小品文ヲ一ツツツ作レ。「春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏——芭蕉」むらぎもの心楽しも春の日に鳥のむらがり遊ぶを見れば——良寛」(姫高、昭和4) / ○空中飛行(東高、昭和6) / ○古城(七高、昭和9)

これらの高等諸学校の入学試験作文の文題を見ると、かなり広い範囲にわたっての出題がなされており、しかもその出題ぶりはかなり自在になされていたことがわかる。当時としてはこうした受験作文の出題傾向を念頭に置きつつ、作文指導を進めていく必要があった。それだけ国語作文のありかたは、受験における出題傾向を無視

することはできず、逆に多くの規制を受けざるをえなかった面があった。

これらの出題傾向が昭和初期の中等作文教育を特色づけていたこと、出題には時代社会の動向が敏感に反映していたこと、課題作文についての手ほどき、対策が必要であったことなど、前掲「文題類別表」によって改めて気づかされる点が多い。

六

さて、八波則吉氏の国語教育に関する著作並びに随想集等は、つぎのとおりである。

- 1 「応用修辞学講話」大正3年11月15日 敬文館刊
- 2 「<sup>中等</sup>国語読本要義」大正8年3月20日 教育研究会刊
- 3 「創作への道」大正10年4月24日 弘道館刊
- 4 「<sup>読本</sup>国語の講習」大正11年4月23日 教育研究会刊
- 5 「教育に安住して」大正12年2月18日 教育研究会刊
- 6 「<sup>二国語</sup>の講習」大正13年4月18日 教育研究会刊
- 7 「本要義と創作」大正13年5月18日 弘道館刊(前掲2「要義」と同3「創作への道」の合本である。)
- 8 「<sup>読本</sup>国語教育概説」大正13年12月3日 教育研究会刊
- 9 「<sup>読本</sup>創作本位の文章法」大正14年10月25日 教育研究会刊
- 10 「第三国語の講習」昭和3年3月3日 教育研究会刊
- 11 「<sup>詩</sup>味情味」昭和4年7月6日 教育研究会刊
- 12 「<sup>詩</sup>希望に充ちて」昭和6年11月15日 教育研究会刊
- 13 「国語教育大道」昭和8年1月28日 東洋図書刊
- 14 「道歌清談」昭和11年11月16日 実業之日本社刊

なお、八波則吉氏には、これらの述作のほかに、「趣味と修養」(大正初期、菊判三五ページ、敬文館)、「<sup>英語</sup>夢の国から」(大正後期、教育研究会刊)などがあった。

前掲1「応用修辭学講話」は、第四高等学校教授時代の著述であり、2「要義」は、文部省図書館時代(大正五年七月—大正九年四月)の仕事である。他は、第五高等学校教授時代の著作である。

八波則吉氏は、前掲1「応用修辭学講話」に、メーケル、ジョン氏「英作文法」の序文の大意を訳出し、「作文問答」と題して、収録しておられる。

また前掲8「<sup>読本</sup>国語教育概説」には、「綴り方教授の極意」と題して、「綴り方教授の極意は良い文章を多く、よく読ませることです。これが私の持論です。」(同上書、四〇ペ)と述べられてゐる。このことについては、さらに、つぎのように述べてある。

「良いとは何か、茲に謂ふ良いとは児童の年齢、程度、思想と相近い作者の書いた傑作を意味します。例えば三年生の児童の綴り方を上手にするには三年生の児童と年齢、学力、環境が相近似せる児童の書いた作の中の傑作を多く、よく読ませるのです。此の意味に於て国語読本(引用者注、八波則吉氏の編纂された「尋常小学国語読本」)には読者と年齢、学力、環境の相近い者の作又はそれに擬した作を従来の読本よりも多く採択してあります。」(同上書、四〇—四一ペ)

「斯ういふ文章を多く読ませるのが綴り方教授の極意ですが、読本にあるだけではまだ足りません。諸君のお手許には其の学校の多年の傑作集が保存されてある筈ですから、其の中のものを小黒板で示すなり、謄写版にして与えるなり、或は隣の学校の生徒が書いたも

のでよく出来て居ると思はれるものがあれば読ませて載きます。それ等は児童の年齢、学力及び環境等がよく当該児童に似て居ますから、斯ういふ文章を多く読むことに依つて児童の綴り方能力を養ふことが出来るのであります。」(同上書、四二ペ)

また八波則吉氏は、前掲9「<sup>読本</sup>創作本意の文章法」に取められた、「文を添削して」という講演記録の中で、つぎのように述べておられる。

「私は課題主義者の一人です。曾て『随意選題の易きを避けよ』と題する論文を発表して論争したこともあります。爾来随意選題の長所をも認めて、これに幾分加味することは致してゐますが、どちらかといへば今でも頑強な課題主義を保持するものです。」(同上書、二八九ペ)

「文話は成るべくならば教師の体験を望みます。『先生が此の文を綴る時には斯ういふ苦心をした』といったような実話は深い感銘を与へるものです。」(同上書、三〇四ペ)

「文の添削をなす先生には先生の苦心談がある筈です。これを私は文話の首位に置きます。」

又、自身が文に苦しんだ経験が無ければ、他人の文章の良否は本当に分らないものです。此の点から申しても作文の先生は、自分自身も絶えず文を作るやうに心掛けたいものです。」(同上書、三〇五—三〇六ペ)

「わがものと思へば慥し奈の雪

といふ古い句がありますが、作文添削といふ重荷も、これを『我が物』と思へば奈も亦其の中に在ります。

私は此の近年、作文教科書又は模範文集といったやうなものを作

つて見ようと志しました。同じ苦勞するなら、何とか楽しく苦勞したいものだと考へた結果なんです。国語の教師として、毎年々々幾組かの作文を担当すべく運命づけられてゐる以上は、作文に関する知識經驗を集め、之を整理したら何物か後世子孫に裨益するものはなからうかと考へまして、生徒作中から傑作―比較的優秀な作を抜いて清書してありますが、既に一冊分の材料が集まりました。斯うして沙石の中から寶石を見附けるやうな仕事も、考へ方に由つては至極興味のある事です。(同上書、三〇六―三〇七頁)

右に見てきたように、八波則吉氏は、つとに応用修辭学に深い関心を示しながら、良い文章を多く、よく読ませることに、綴り方教授の極意を求め、みずからは課題主義者の立場を堅持し、文話のありかたについても、教師自身の体験、苦心談を重視していくように考へられてゐる。

八波則吉氏自身は、積極的に文章を書き、創作活動を活発につづけられ、多くの作品(童話・童話劇・童謡・随想等)をも のされ た。その豊富な文章・創作体験が氏の作文・綴り方教育の論の根底に見いだされる。

これらの基本的な考え方ならびに多くの文章・創作体験が八波則吉氏の編著にかかる中等作文教科書の成立を支えていたことは、ここに改めて指摘するまでもないであらう。

## 七

以上、八波則吉氏の編著にかかる中等作文教科書の編修方針と意図、その構成ならびに特性を見てきた、その成立の基盤の一つである、八波則吉氏自身の作文指導論の一端にも言及した。

八波則吉氏の中作文教科書は、内容上も構成上も穩健であり均

衡がとれていて、一応よくまとまつたものとなっている。

ただ、各種中等作文教科書が学校における作文指導のための副教科書として、また、自習書として、さらにまた課外読物として、あるいは文集(文例集)として使用されるばあい、それぞれどのように活用されたのか、その詳細をとらえることはむずかしい。

副教科書としても、自習書としても、学習者(生徒)に眞の学習意欲をおこさせることができたかどうか、さまざまなくふうと苦心があつたにしても、所収教材だけで、生徒たちに文章への意欲をもたせることはなお容易ではない。

掲げられた、文章例にしても、中等学校生徒の作を集めて選ばれているが、同年齢・同世代の作というだけでに充足されないものがある。課外読物として生かしていくばあいに、各課の提示のしかたをはじめ、どれだけ興味深くとり上げられているかなど、なお検討しなければならない。

本文・別刷・文例・類題・附録など、作文教科書としては、昭和一〇年代の初めに一通り整つたものとなつていた。媒材として、副教科書として、それらを眞に活用していくのには、指導者としての格別の配慮を必要とする。それだけ作文指導の実を挙げるためには、指導者自身の修練が求められる。それにしても、指導者によつて眞に生かされる作文教科書という願ひは、なかなか満たされな

(昭和54年5月11日稿) (本学教授)